

中江丑吉・市塵の思考者について

20150606 湘南科学史懇話会 於：藤沢市労働会館

竹中英俊

#### 趣旨

中江丑吉（1889.8.14－1942.8.3）について話しをする。

中江兆民の長男として大阪に生まれ、1913年に東京帝大法科大学政治学科を卒業後、翌年8月に袁世凱の憲法制定顧問となった有賀長雄博士の助手として北京へ。15年夏にいったん日本に帰り、数ヶ月後に再び中国に渡り30年にわたる北京での生活を始める。

1919年五四運動のさい（日本に来た時に中江家に世話になったことのある中国高官の）曹汝霖・章宗祥を救い、その前後から独学で中国古代学を研究。日本共産党の片山潜や佐野学をかくまい、中国革共産党員の鈴江言一の援助はするが、自らは、中国古典についての研究をするとともに、カント、ヘーゲル、マルクスやウェーバーを原書で精読する日々を送った。

1937年蘆溝橋事件を「世界戦争の序曲」と断定し、幼馴染の関東軍参謀今田新太郎中佐に拡大防止を勧告。1941年12月の太平洋戦争開戦直後、日独の枢軸側の必敗を予見し、北京の憲兵隊には「聖戦を白眼視するスネモノ」とみなされた。

肺結核で日本に戻り、福岡の九州大学病院で1942年8月死去。墓は青山墓地。北京の日本人墓に分骨。

没後に『中国古代政治思想』（岩波書店）、『中江丑吉書簡集』（みすず書房）が刊行される。また、丑吉を伝える最も優れたものとしてがある。

私にとっては、20代後半、東大出版会にいて、現実の政治と社会に対して、人間として・出版人として、どのようにかわるか、という問いに悩み、答えを出せないまま苦しんでいたときに、導きの星となった存在である。歴史哲学的洞察により、人類のヒューマニティを信じ、人間の可能性に確信を持ち、そして社会科学を駆使して現状を批判的に分析して、時代の行く末を見据えようとした、その透徹した思考とマッセ（大衆）の一人としての生き方は、その後の私の人間・出版人としての歩みの方向を定めたといっている。

そのような中江丑吉という人間の姿を話してみたい。

#### 参考文献

中江丑吉『中国古代政治思想』（岩波書店 1950）

鈴江言一・伊藤武雄・加藤惟孝編『中江丑吉書簡集』（みすず書房 1964）

鈴木正・阪谷芳直編『中江丑吉の人間像 兆民を継ぐもの』（風媒社 1972）

ジョシュア・A・フォーゲル著、阪谷芳直訳『中江丑吉と中国 ―ヒューマニストの生と学問』（岩波書店 1992）

阪谷芳直『中江丑吉の肖像』（勁草書房 1991）

中江丑吉語録（『中江丑吉の人間像』より）

【死を前にしての中江丑吉のメモ】

\*1942年6月8日、九州帝国大学附属病院にて。

一睡もせず。愈々死を現実のものとして覚悟す。活きる積りで来た福岡で死んで行くのは、一寸馬鹿馬鹿しいが、之れ亦已むを得ずとすれば没有法子〔仕方がない〕也。

あれこれ万感交錯せるも結局何にもならず。無名より無名に没入する外なし。然しメンシュハイト〔人類／人間であること〕の力を達識せる事は何人にも譲らず。メンシュハイトはかかる無名の個我を吸収し、有名の個我を恰も自由な存在なるかの如く行動せしむる体様に於て、自己の発展進歩を成就し得るのみ。

\*7月22日

発熱一睡もせず。我にミラクルの力を賦与せしめよ。必ず其れに値す可ければ也。到底生還し能はずと観念す。

\*7月28日

不快眠。死の脅威迫る。

も覚悟は定めた。今後は生理的苦痛にどれ丈け堪へ得るかに在り。

\*8月3日午後6時5分50秒、死去。

【鈴江言一あて書簡】

\*病気の克服ふくも又、人類の最も顕著な特質の一つとして、各個人に課せられて居るアルバイトだと思ひます。各個人に生を愛し死を畏れる本能が天賦されて居る限り、殆ど普通の事として此仕事の価値が看過され、云はばあたりまへの事柄として扱はれて居ります。然しかりにあたり前の事であっても、此「あたり前」の事は生物界に人類を君臨させて居る幾ツかの優秀な性能の一つである事は、馬鹿でないものなら直に納得出来るだろうと思ひます。（1937年5月31日）

【加藤惟孝「或る個性の記録」より

\*ある場合には一般の個体にとって積極的な闘病は間違いのない進歩的な仕事であり、それがモラルだ。

\*一人の子供をよく育てる仕事や一輛の車の部分品を作る仕事に匹敵する価値を持った著書は何冊あるか。

\*『資本論』を読まない頭は子供の頭だ。

### 【阪谷芳直とのやり取り】

\*昭和16年4月30日付 書簡

一つの社会から他の社会に移る時或種の学問なり知識が全く無力化し無価値化するの  
は、所謂階級支配の Werkzuig [道具] としてのみ存在して居るからであります。然し  
此場合と雖も其学問なり知識なりが、本来人格と不可分たるにも拘らず、之を器具化し  
ミッテル化した錯覚の為めであります。

ヘーゲルが云って居る如くに、我々人類の生活がそうである様に、学問、知識の発展  
の過程も esoterisch [秘儀的な] から exorerisch [通俗的な] [へ] であります。

学問や知識を「一つの力」視し又は以て他人に優位する特権か飯椀かの如くに思ふの  
は、嘗つて「文字」がマジカルパワーであり占星術が僧侶支配の道具であったのと変ら  
ない時代を現代に求める様な途方もないアナクロニズムに外ならず。

\*昭和16年5月31日付

こふ云ふ時代に見透しなぞあるものか、かかる言葉が滔々風を為して居るのを見聞  
する位ひ、凄凉たる感じを覚える事はありません。此歴史の最進歩的段階が更により発  
展せんとする時代に、よしんばどんな崩壊や混乱があっても、若し懐抱する確信と見透  
しとが無いなら、人間は其の一貫して絶へざるヒューマニティーなる名の下に、何の為  
めに、有史以来丈けでも一万年に及ぼんとする今日迄の生活を継続し、綿々脈々として  
絶へざるヒューマニティーを持続し、更に発展せしめんとするのか。若し学問がこうし  
た方面への意望の圧迫なら、毒学に非ずんば、死学也。・・・

求学者はオポチュニストに非ず。況んやスペキュレーターに非ず。・・・彼は一個真  
摯真銘なる「求道者」也。時にあつては惨たん凄痛なる中世の乞食僧よりも、更に印度  
のブラーマンよりも、一層の難行と苦業とを、此商品生産の最高に達したる時代にも辞  
する不能。彼れは如何なる暗黒時代にも、又如何なる乱世にも決して絶滅する事なきヒ  
ューマニティー即ち真理への赤心敬虔けんの信仰者なれば也。

○昭和16年夏 北京にて

中江さんから日独の必敗を説かれても私はなかなか承服しなかった。

「ドイツが貧窮のドン底に喘ぎ苛酷な圧迫を喫している間は、あのナチのナショナリズ  
ムも、大ドイツ主義も、一応のレーゾン・デートルを持ちえたと言えるが、一たびナチ  
がズデーテン進駐を行なつて以後は、もはやそこには征服と被征服、侵略者と奴隷の関  
係しか見出せなくなっている。邪は正には勝てぬ。ドイツは必ず敗れる」

というその言葉を私がなおも納得しないでいると、中江さんは、

「では君は、枢軸が勝って、ナチス・ドイツや日本のあのような体制が世界を蔽うに至ったら、人間のレーベンはレーゾン・デートルを持つと思うか？ またその下で生きたいと思うか？」

と声を励して鋭く反問した。私がさすがに「否」と答えると、

「そうだろう。人間の合理的思惟に堪えられないようなものが勝つことはありえない。そうだったら、歴史というものにはおよそ意味がないことになる。だから日本も同じことだ。こういっても、君はこっちを単なる敗戦主義者だとは思わないだろう。今の方向で行って日本が仮に勝利を占めることがあったとすれば、軍の驕慢や官僚の独善やらは天井知らずになり、健全で明朗な民族の生長などは絶対に望めなくなる。だから病根を抱いて不健全に膨脹するよりも、負けて民族の性格を根本的に叩き直す方がいいんだ」とズバリといわれた。（阪谷芳直「世界史進展の法則」より）

○昭和16年8月15日、阪谷芳直北京滞在最後の日に

「今度君に会えるとしたら、それは北京でなくて東京だろう。が、いずれにしても、こういう時代には必ずスケプティシズム（懐疑主義）が起ってくる。君はいかなる事態がこようと、こういうスケプティシズムに陥ってはならない。そうしたものにいたされず真っすぐ生きていくように」

「世界史は『ヒューマニティー』の方向に沿ってのみ進展する。いいかえれば『ヒューマニティー』を担っているもののみが世界史の真のトレーガーたりうる。これが世界史進展の法則だ。いかに強勢を誇ろうとも、『ヒューマニティー』を持続発展せしめる方向をとらぬものは、結局潰えざるを得ない。

現在の世界的対立をみると、『ヒューマニティー』を担っているのは、明らかにデモクラシイ国家側であって枢軸側ではない。だから、この世界戦争の究極の勝利は必ずデモクラシイ国家のものだ。……ナチス・ドイツは必ず倒れる。それも決して遠いことではない。そしてヒットラーは白日の下にバツタリ倒れる。凡人の凡眼からはそう見えなくとも、達人の達眼からは明々白々たる事実だ」

「日本も近く大戦争を惹起し、そして結局は満州はおろか、台湾、朝鮮までもモギ取られる日が必ずくる。日本は有史以来の艱難の底に沈むだろう。こっちはそのときこそ筆をもって国に報いるつもりだ。だが、ドイツも日本もけっして全く無だというのではない。ともに『アンティ・テーゼ』であり『ニヒト・ザイン』としての役割を持っているんだ。だから、戦後の新しい秩序も従来のデモクラシイそのままではありえない。必ずアウフヘーベン（止揚）された新しいデモクラシイが現れるはずだ。……」（同上）

「学術書の名に値する学術書」(1994.12.18 私的内部文書)

《学術書、しかも高度の学的厳密さをもった専門書を、専門外の立場から批評することは、危険である。しかし一方からいえば、その危険を冒してまでも、批評—というより、勝手な感想を述べたくなるような、一般的問題性を含む書物でなければ、学術書としても価値が低い、ということも成り立つかもしれない。高い峰が、あらゆる方向から、それぞれの形で眺められるように、ある学問が個別科学に徹底すればするほど、その学問は個別性を越えて、真理追求の人間的情熱の普遍性のために、より深い感動を読者に与えるのが普通である。本書は、そうした種類の書物のひとつである。》

これは、中江丑吉著『中国古代政治思想』に対する竹内好の書評の冒頭の一節である。この短い文章に示される学術書の価値については、それがすべてではないにしても、一つの極をなすものと考えてさしつかえないはずである。

竹内は、中江の学問の特徴について、以下の三点を挙げている。(a)「体系への志向の激しい気魄」、(b)「学問の無償性」、(c)「激しい現代批判の情熱」、である。やや竹内流の嫌がないわけでもないが、十分に首肯しうる指摘である。竹内の文章を引いたのは、私自身かねて、ここに示されるような学術書を作りたいと考えてきたからにほかならない。「学術書の名に値する学術書」と彼が言うときの、一つのありかたがここにあると考える。そしてまた、私はいくぶんかはそれを実現してきたはずだという思いがあるからである。

学術書を作っていて、数少ないながらも「感動」を与える作品がある。(もとよりこのことは、学術書に限られるわけではない。教科書、教養書にあっても、また注釈書の類いでもそのようなものがありえる。)

何が感動を与えるのか。それは「文体」である、としか言いようがないのであるが、竹内にならってパラフレーズしておこう、つまり、(a)「学問への志向の激しい気魄」、(b)「学問の無償性の自覚」、(c)「学問・社会・世界への批判の情熱」、である。この三つが「文体」を規定するのである。すぐれた学術書は、様々な要素でその価値が作られているのであるが、少なくともこの三つの要素が含まれている。そしてその学術書は「個別科学」を越えるのである。

(こう言うとき、私は必然的に夏目漱石の「文展と芸術」の冒頭の一節—「芸術は自己の表現に始って、自己の表現に終るものである」と言い切ったことを想起せざるをえない。芸術の表現と学問の表現を混同している、と言うなかれ。両者は表現の位相から捉えれば同一平面に位置付けられるのである。)

タテ、トリ、ツクリ及びウリで重要なのは、「学術書の名に値する学術書」「優れた学術書」の見極めである。—平凡な言い方になってしまうが、これを確実に実践すること、そして実践し続けていくことが、学術書出版を世界第一線で担う我が会の(変わらぬ)課題である。(HT)

自己紹介（2015年4月）

1952年生まれ。早稲田大学を1975年に卒業。財団法人東京大学出版会には卒業以前の1974年に就職する。委託製作部門を経て、1980年に編集部へ異動、1991年に東京大学出版会労働組合執行委員長、1992年に編集部長、1997年に編集局次長兼編集部長、2001年に編集局長兼編集部長、2005年に常務理事兼編集局長兼編集部長、2008年に常務理事兼編集局長、2011年10月に常務理事、2012年4月に常任顧問、2015年3月退職。

編集者としては「横断媒介」をキー概念として、人と人とを結ぶ出版の基点に立った編集企画を目指した。企画・編集に関わった市販本の点数は、DVDを含め、五百点。シリーズ企画を中心に整理すると以下のようなになる。

1980年代一：学派を横断媒介する政治学の編集出版 『現代政治学叢書』全20巻（1988-2012 予定）、『講座国際政治』全5巻（1989）、『行政学叢書』全12巻（2006-）、『国際政治学講座』全4巻（2004-）

1990年代一：専門を横断媒介する地域研究の編集出版 『東アジアの国家と社会』全6巻（1992-93）、『講座現代アジア』全4巻（1994）、『中東イスラム世界』全9巻（1995-98）、『現代中国の構造変動』全8巻（2000-01）、『日英交流史』全5巻（2000-01）、『現代南アジア』全6巻（2002-03）、『イスラーム地域研究叢書』全8巻（2003-05）、『アメリカ文化史』全5巻（2005-06）

2000年代一：学問を横断媒介する社会科学・公共哲学の編集出版 『社会科学の理論とモデル』全12巻（2000-10）、『公共哲学』全20巻（2001-06）、『シリーズ物語り論』全3巻（2007）、『公共する人間』全5巻（2010-11）

2000年代一：時代を横断媒介する復刊・新装版の編集出版 『新装版 日米関係史：開戦に至る十年』全4巻（2000）、『近代日本の思想家』全11巻（2007-08）、『日本政党史論』全7巻（2011）

ほかに『講座現代居住』全5巻（1996）、『社会保障と経済』全3巻（2009-10）。また、2013年刊行の『モンゴル帝国史研究 正篇』で著者が2015年度日本学士院賞受賞。